

クォータースターコンテスト用

# 池やんとオレ

(演劇版)

作 大岡俊彦

## 登場人物表

ヨシオ (35) 調子のいい、お人よしのサラリーマン。  
池やん (35) ヨシオの親友。落ち着いた深い思考の人。  
池やんの妻 (35)

○居酒屋のカウンター

一人でツマミとビールで待っているサ  
ラリーマン、ヨシオ（35）。

（以下、黒バック、小道具なし、テー  
ブルと椅子のみ）

そこへ、池やん（35）が慌てて入っ  
てくる。

ヨシオ「おせえよ池やん！」

池やん「ゴメンゴメン。出ようと思ったら出  
会い頭にぶつかっちゃってさ」

ヨシオ「なにが？」

池やん「なんだっけ。まあいいや。（店員に）  
ビール。（ヨシオに）なんだよ先はじめてん  
じゃねえよ」

ヨシオ「だってお前が9時つつたから」

ビールが来た。

池やん「とりあえず乾杯」

二人「うーい」

とグラスを合わせ、グビグビプハー。

ヨシオ「いやあしかし、今日はヤバかったね」

池やん「お前いつもヤバイじゃねえか」

ヨシオ「いや。いつもヤバイけど、今日はヤ  
バイ中のヤバイだよ。まじ池やんのフォロ  
ーなかったら、ウチの会社潰れてたぜ」

池やん「潰れりやしねえけど、お前うっかり  
過ぎだろ」

ヨシオ「まじヤバかった」

池やん「ホントお前一人で大丈夫かよ」

ヨシオ「大丈夫大丈夫！（もう酔ってる）」

池やん「ぜってえやべえ」

ヨシオ「ワハハハ」

池やん「今日はお前払えよ。それ位仕事やっ  
てやっただろ」

ヨシオ「ワハハハ。（ビール飲み干し、店員に）  
焼酎。：しっかし池やんは昔からフォロー  
うめえよな。小中高大、会社とき。お世話  
になっっております」

池やん「オレその度にフォローしてんのかよ」  
ヨシオ「池やんが『一人で大丈夫か？』って

言うときは、大抵マジヤベエときでさ」

池やん「いつもヤベエじゃねえか」

ヨシオ「あ。野球部のさ。覚えてる？ オレが投げてさ、打たれてもさ、うしろで池やんが捕ってくれるわ、みたいに思ってたよ」

池やん「打たせて捕る」

ヨシオ「打たれても捕ってくれる作戦」

池やん「ふざけんな」

ヨシオ「ワハハハ」

焼酎が来る。飲みながら。

池やん「そういえばさ」

ヨシオ「何？」

池やん「あのボール、返してよ」

ヨシオ「何？」

池やん「高三の夏の、ウイニングボール」

ヨシオ「オレら高三まで野球部やってたっけ」

池やん「そうだよ」

ヨシオ「だからバカ大学バカ会社か」

池やん「名コンビって言えよ」

ヨシオ「ワハハハ。…あの、名コンビの証？」

池やん「アレずつと気になってたんだよ。オ

マエが持つてるの、やっぱヘンだよ。オレ

が捕って勝ったんだ。そろそろ返してくれ

よ」

ヨシオ「やだよ」

池やん「なんでだよ」

ヨシオ「ウソだよ。オレが欲しいーっつ

つたらオマエ素直にくれたもんな。返すよ

(と立つ)

池やん「え」

ヨシオ「しよんべん」

ヨシオは既にフラフラである。壁にぶ

つかったり。

池やん「オイ一人で大丈夫かよ」

ヨシオ「大ー丈ー夫ーだよー。ヤバイ。

マジヤバイ。ここでしよんべん…と見せか

けてフェイント」

と一旦トイレへ。

池やん「(店員に) 水、大目にしといて」

池やんはひとり飲む。

帰ってきたヨシオに。

池やん「オレさ、ずっとオマエに言っていない秘密が…」

ヨシオ「(聞かずに) そういえばさ、あの女から電話かかってきたんだけど、覚えてる？」

池やん「女？」

ヨシオ「二人で大学ん時テレクラいったじゃん。待ち合わせたブスいたじゃん」

池やん「やべーブス来たー！って石投げて猛ダッシュしたやつ？」

ヨシオ「そう。それ。オレ実はさ、あのあとヤッたんだよ」

池やん「マジで！？ この世の果てかと思ったぞ！？」

ヨシオ「どうしても童貞捨てたかったんだよ。若かったんだよオレ。ずっと秘密にしていたんだけどさ」

池やん「で電話かかってきたって？」

ヨシオ「おうオレあれから電話番号変えてねえんだなーって思ったわ。明日からケータイ変えようかと思って」

池やん「ヒデエな」

ヨシオ「だってブスだぜ？」

池やん「ブスじゃな」

ヨシオ「アレでオレ大人になったんだよ。ワハハハ。よし今日は暴露大会だな。池やんはいつ大人になったんだよ？」

池やん「大人か。(真面目になる) …… そうだな。小4だな」

ヨシオ「オマエ小4でやったの！？」

池やん「ちげーよ。オレは一人なんだな、一人で生きてかなきゃいけねえんだな、って思った時」

ヨシオ「え、…なんでそんなこと思ったの」

池やん「いじめられてただろオレ」

ヨシオ「そうなの？ 言えよ。知らなかったよオレ。なんで言わねえんだよ」

池やん「オマエは昔からそういうところ鈍いな」

ヨシオ「小4だろ。(考えて)クラス隣のときだよな。誰だ、たけしか」

池やん「：そんなときから、オレは大人になった気がする」

ヨシオ「一人だなんてさびしい事言うなよ。人間はみんな生きてるから面白いんじゃないかよ。チームなんだよオレらみんなさあ」

池やん「それを教えてくれたのもオマエだよ」  
ヨシオ「？」

池やん「オマエが野球部にさそったんじゃない」  
ヨシオ「え？ オレだっけ？」

池やん「ホント覚えてねーな。それでいじめのスパイラルから抜けだせたんだ。：お前はオレが助けたみたいに言ってるけど、本当は、逆なんだ。お前がオレを助けてくれたんだ」

ヨシオ「覚えてねーなあ」

池やん「そんなもんだよ。：それがいいんだよ」

一杯飲みほす池やん。

池やん「：今までずっと秘密にしてたんだけどさ…。言うよ」

ヨシオ「：なに？」

池やん「あの試合のボール、実は落としてた」  
ヨシオ「マジで!？」

池やん「オレしか知らない。審判から見えてない角度だった。所詮地方試合だし、審判も適当だったし。オレが捕ったフリでごまかして、あの試合、勝った」

それを手振りで再現してみせる。

ヨシオ「ウソ!? 池やんスゲー捕ったよってずっと思ってたよ」

池やん「：それでオマエがすげー喜んで、このボールくれて、オレたちコンビの証だって言うからさ。：でもあのボールはウソボールだ。あの試合、本当は勝ってなかったんだ」

ヨシオ「(焼酎を一気のみ)：関係ねえよ。関係ねえよ。ウソボールなんかじゃねえよ。」

あのボールはオレたちがコンビでずっとやってきた証なんだよ。打ってもらって捕ってもらおうコンビなんだよ」

池やん「…」

ヨシオ「？」

池やん「今気づいたんだけどさ」

ヨシオ「おう」

池やん「オレの方が負担でけーじゃねえか」

ヨシオ「えっ、ワハハハハハハ」

池やん「ホントムカつくわ」

ヨシオ「ワハハハ」

池やん「ちょ、うんこ行ってくるわ」

立つ。酔っているのか、ふらりと。

ヨシオ「お前は一人でうんこできんのかよ」

池やん「一人で大丈夫だよ。…お前はどうかんだよ」

ヨシオ「一人で大丈夫だよ」

池やん「ワハハハ。そうだよな」

と、トイレへ。

ヨシオ「(店員に) スイマセンもう一杯」

しかし、池やんはなかなか帰ってこない。そこにケータイが鳴る。

ヨシオ「ハイ。あオレすけど。三丁目。ハイ。

…え、嘘でしょ!？」

動揺してトイレを見に行くヨシオ。

ヨシオ「オイ！」

誰もいなくて帰ってくる。

ヨシオ「うんこ行ったよ池やん。いねえよ池やん。…何言ってるんのお前。何言ってるの?」

…会社出て、出会い頭でトラックにぶつかって…池やんが死んだってどういうことだよ!」

カメラ、横にパンすると次の場。

## ○通夜

同じく黒バツク。

喪服姿の池やんの妻(35)に、黒ネクタイのヨシオが挨拶する。

ヨシオ「こんな形で、奥さんに会うとは思わなかつたです」

池やんの妻「……」

ヨシオ「池やんが死んだなんて……まだ信じられないです。……オレ、酔っぱらいすぎてたのかな。あいつが交通事故で死んだその時間、オレあいつと飲んでたんですよ。久しぶりに野球の話して、(ボロボロのボールを出して)あいつにコレ返してって言われて、お前がオレを助けてくれてたんだって、わりと真顔で言ってたんすよ。これはウソボール、ウソじゃねえって話してたんすよ。……オレ、酔っぱらってただけなのかな……」

池やんの妻「きのうの晩、私の所へ夢の中で会いに来てくれた気がするんです。夢枕に立つってやつですか。……たぶん、あなたの所へ行ったんだと思います」

ヨシオ、池やんの遺影にボールを見せる。

池やんの妻「線香、あげてやってください」

ヨシオ、遺影の前にすすむ。

(妻、はける)

ヨシオ「……返しに来たよ」

後方にスポットライト。そこへ池やんが現れる。

池やん「ヨシオ。一人で大丈夫か」

ヨシオ「心配すんじゃねーよ。ウンコもしょんべんも一人でできるよ。野球も、仕事も一人で、大丈夫だよ。……心配なんかしてんじゃねーよ」

池やん「そうか。……大丈夫か」

ヨシオ「……」

ヨシオ、ボールを投げ上げる。地面ぎりぎりですくすくとして、落とすけど、池やんがやったように、捕ったようにごまかす。ヨシオ、笑う。

ヨシオ「……やっぱコレ、オレがもつとくわ。

一人じゃ大丈夫じゃねえ時用にな」

池やん、笑う。